令和４年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会会議録		
日　　時	令和４年８月10日（水）10時00分～12時17分	
開催場所	市庁舎18階共用会議室みなと６・７	
出 席 者	野原委員長、六川副委員長、遠藤委員、岡本委員、菅野委員、日沼委員、簑谷委員、山口委員	
オブザーバー	恵良氏、加藤氏、山野氏、西倉氏、細淵氏、矢野氏、岡田氏、橋口氏	
欠 席 者	治田委員	
開催形態	一部非公開	
議　　題	１　審議事項 （１）令和３年度事業評価について （２）旧第一銀行横浜支店の公募結果について ２　その他	
決定事項		
	事務局	【開会】 ○令和４年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会を開催する。 【挨拶】 ○文化観光局文化芸術創造都市推進部長から挨拶が行われた。 【事務局紹介】 ○人事異動に伴う事務局紹介が行われた。 【資料確認】 ○配付資料の確認が行われた。 【定足数の確認】 ○委員９名中８名が出席しており、委員会の成立となる。 【会議の公開・非公開】 ○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により原則公開となるが、審議事項（２）については、同条例第７条第２項に基づき非公開とするが、よろしいか。 （了承） **１　審議事項（１）：令和３年度事業評価について** ＜事務局より説明が行われ、議題について審議が行われた。＞
	野原委員長 山口委員	○各分科会の議長から説明をお願いする。 ○急な坂スタジオは、感染対策という点でも、アーティストへのサポー

		トという点でも、慎重かつ丁寧に運営されていて、それが長期的に見ても非常に重要な成果を生み出していると私たちは評価しています。国内もさることながら、国際的に活躍するアーティストも次々に輩出されていますし、また、新しい世代にサポートアーティストを移していくことについても期待しています。令和３年度はコロナの影響がまだあったにもかかわらず感染者が出ませんでしたし、子供向けの事業や小学校へのアーティストの派遣も非常にいい成果になっています。また、これまでの実績をデータとしてまとめるというお話もあり、急な坂スタジオの取組の成果のプレゼンテーションになるだけでなく、創造都市施策としての成果、また、アーティストなどの制作側、もしくは支援も含めた観客の方々にとっても一つの宝物、あるいはレファレンスになるようなものになればいいなと思っています。
	日沼委員	○黄金町は、コロナ禍における経験値、方法論が積み上がり、アーティスト・イン・レジデンスの受け入れをフレキシブルにスタートすることができています。現場の皆さんからも意義ある活動をしようという意気込みを感じる報告もあり、非常に期待しているところです。一方で、レジデンス事業は、BankART1929 やその他の拠点でも行われているため、差別化が大事で、黄金町の強みを考えていくという意味でも必要になってくるだろうという話をしました。次に、ソフト事業をしながら、滞在施設などのハード整備もする黄金町ならではの運営に非常に苦労されているという印象を受けました。また、他エリアへの展開のニーズも出てきている一方で、どの仕事に重点をおくかのバランスが、これからどんどん課題になってくると思っています。それから、他の拠点でもスクール事業を行っていますので、やはり差別化というか、事業の中で見直しが必要ではないかという話が挙がっています。最後に、その年々の実績を非常に大きく評価しているところですが、それを数値化、データ化していくことが大きな課題になっていると思います。実績を見える形にするという大きな見直しに、市全体で取り組んでいただきたいという意見が出ました。拠点だけの課題ではなく、創造界隈拠点全体の取組として、ぜひ検討していただきたい。
	簑谷委員	○BankART1929 は、コロナの影響でいうと、経済面ではカフェやショップの売上は減っていますが、助成金などで収入面ではカバーできています。それから、スクール事業も１年半ぶりに再開しましたが、定員を確保できています。アーティストの活動支援では、展示スペースだけではなく、制作の場という要素が強みとしてうまく機能している点が分科会で評価されています。また、オンラインミーティングによる海外とのネットワークについて、リアルでイベントができなくても、そういう関係性を維持できているということを高く評価すべきという意見が出ていました。それと、都市デザイン横浜展が盛況だったということですが、SNS での広がりもあり、これまでの取組の積み重

		ねでファンがついていることや、ネットワークが機能している証拠であろうということで、このあたりも高く評価されています。それから、Under35 ですが、１つ作品が売れて、１つ仕事につながり、１回プレスに取り上げられるという、１・１・１というような言い方をされていたと思いますけれども、そういう目標を自ら設定して実現していることも、かなり高く評価しています。課題としては、さらなる経済的自立や話題化という点で、例えば、カフェの充実化やギャラリービジネスの展開といった意見がありました。総評にありますが、アーティストと一般客の居心地のよさというのはバランスをうまく取らないといけないという意見や、事業展開の中で、例えば新事業による収入増と、市の補助金との兼ね合い等、公共性とビジネスのバランスについて市とすり合わせることが課題だろうという意見がありました。
	菅野委員	○象の鼻テラスは、運営は非常に安定しており、コロナ禍という大変厳しい中で、実績を着実に積み重ねておられ、運営団体のご努力と信頼できる運営体制に対して、全体的に高評価でした。PORT JOURNEY の取組として鶴見で実施している we Trees というアートプロジェクトでは、コロナ過で非常に難しい状況ではあったと思いますが、Zoom の活用やいろいろなワークショップを地元の方たちと展開し、何とか継続させようとされていて、そういった取組も非常に評価が高かったです。それから、フューチャースケーププロジェクトは不特定多数の市民を対象にしており、市民の取組に寄り添い、未来に向けたプロジェクトとして取り組んでいることが、象の鼻テラスの個性であり、他の拠点との違いという点でも評価が高かったです。一方で、こういったプロジェクトが、今話題となっているウェルビーイングやクオリティ・オブ・ライフという、市民の日常に寄り添ったプログラムに変わってきているのではないか、そういった観点からの評価軸が必要ではないかというご指摘が一つありました。それから、自己評価や委員会の評価について、これまでナラティブを中心とした形での評価でしたが、事業のインパクト、社会的な効果をどのように評価するか、ビフォーアフターを具体的に評価する時期なのではないか、また、それは市とどのようにやっていくか考えていくべきではないかというご指摘がありました。数値目標だけではないのですが、具体的な目標を設け、それとナラティブ、あるいはデータ、エビデンスなど、何に基づいて評価をするのかが重要という意見も出ました。
	野原委員長	○THE BAYS は、コロナ禍においてもいろいろなプロジェクトにチャレンジされており、活動量の豊富さという意味では、委員から評価をいただいておりました。一方で、活動自体が創造都市施策の中でどのように行われているか少し見えにくいとか、基本方針①の「関内・関外地区における創造産業の集積をさらに推進し、これを横浜経済の活性化につなげる」を１つの拠点だけで成し遂げるには目標があまりに大

		き過ぎて難しく、具体的な目標が逆に曖昧になっているところもあるので、この場所で何をミッションとしてやっていくのかという意識合わせが必要になるのではというご意見がありました。また、いろいろなお客さんや利用者を獲得されている中で、そこへの波及効果がもう少し可視化され、どういう結果につながったのかがきちんと見えることも大事なのではないかと。それが、ひいては結果的に活動の見直しや、よりよくする原点にもなるのではないかと。他の拠点でもデータの話がありましたが、具体的な情報、データを集めて具体化することが次の方向性にもつながるといいのではないかという話もございました。あと、クリエイティブ×スポーツを取組のメインに置いているのですが、そのクリエイティブの部分がもう少し見える化がされると、どのような形で創造都市施策に寄与しているかが見えてくると思うので、今後は、創造都市の方向性ともうまくすり合うような形の活動であったり見せ方だったりが必要とされているのではないか、という評価だったと思います。また、毎回出てくる話としては、広報です。各拠点の取組を、創造都市施策の広報としてどう見せていくか。今までの広報の効果や結果を見た上で、拠点側からも、こういう告知や広報が欲しいとか、こういうのを一緒にやりたいとか、市と連携してこういう形でやりたいとか、市とも一緒に考えながらやっていくことが大事なのかなと。そういったところの議論がありました。 〇続きまして、ディレクターの皆様からも一言コメントをいただきたいと思います。
	加藤氏	〇急な坂スタジオについて、なかなか大変だなというのが正直なところです。演劇公演はスタートしているのですが、公演の途中で関係者が体調不良になり、検査したらコロナ陽性になってしまって公演中止というのがいまだに続いている状態です。ようやくイベント前の検査が不要になったので、ここからちょっと変わっていくかなと思っています。今年度から新たに５年間、運営をさせていただけることになりました。最も力を入れて取り組みたいと思っているのが世代交代でして、まず私自身がディレクターを退任し、私よりできれば一回りぐらい若い人にディレクター職を譲りたいと思っています。また、業界全体の課題として考えなければいけないのは、コロナ禍の３年間で学生時代を過ごした人たちが、この先、舞台芸術やアートに関連する仕事に就きたいと、果たして想像できるだろうかということです。コロナ禍で作品を作れているアーティストは強い人たちだと思うので、多分今後も作り続けられるのですが、さらに若い世代、今、中学、高校の多感な時期にマスクをしながら過ごした人たちが、どうやって舞台芸術の作品と出会い、それがすばらしいものだ、面白いものだと感じてくれるか、ということを知るための期間みたいなものを丁寧につくっていくことが、この先、重要なことではないかと思っています。

	山野氏	○黄金町も結構大変な１年を過ごさせていただきました。レジデンスの公募を再開し、若干減少していたレジデンスアーティストの数字は戻りました。海外の公募も再開し、いつ来てもよいとのことで 14 名を採用したら、今年、続々と来ております。だから今、ある意味黄金町は外国人だらけの状態で元の状況には戻ったという感じです。それともう一つ、前年度はエリアを広げるという方向性を考え、地域間の付き合いがあまりないところ同士を、アートというキーワードでつなぎ、さらに交通、宿泊、もちろん、商業施設みたいなものも入ってくる、そういう総合的な組合せの中での実験的な企画を行いました。これが一つの将来の、黄金町の方向性かなという風にも思っています。周辺の文化関係者の皆さんとお話しする機会が増えたのですが、なぜ黄金町だけ市の補助金が入っているのかという意見が結構多かった。だから、我々の活動自体が他の地域でも有効性を持たなければいけないという感じを持ちました。そのため、今後もこの方向性をもう少し考えていきたいと思っています。
	細淵氏	○BankART1929 の一番大きな出来事はやはり池田代表が急逝したことです。創造都市政策に最初から関わっていましたので、池田が残したもの、やってきたこと、考えていたことを、次に代表になった私だけでなく、創造都市に関わる皆さんと共にもう一度検証していけたらと思っております。令和３年度ですが、前半はまだコロナの影響もありましたので、制作の場所としての空間使用に切り替え、通常１期おこなっていたスタジオ事業を２期行いました。中盤から後半にかけては、主催事業、コーディネート事業共に今までコロナ禍でできなかったこと、１年前、２年前に企画していたものを実現させることができました。オファーも多く、コーディネート事業の稼働率や収入もかなりありました。収入面でいいますと、カフェ、パブが運営できないことによるコロナの補償金もありました。最後に開催した「都市デザイン横浜展」は、池田が直接関わった最後の展覧会になりますが、こちらが好評を博したということで、元々年度末までだった企画が、もう１か月、４月末まで延長し、かなりたくさんの方にご来場いただきました。次は創造都市 20 周年という形で同じように、広く市民に知っていただくような機会をつくりたいというのが、池田が最後に言っていたことですので、それを実現していけたらと思っています。
	岡田氏	○象の鼻テラスもコロナの影響が非常に甚大で、いつか戻るだろうと思って既に３年経っておりますけれども、やはり戻らないのではないかということで、活動のテーマを、巷ではニューノーマルと言われていますが、我々はネクストノーマルと、もうかつての日常が戻らないことを前提に、今年度から各種事業や運営体制について見直しています。今年度に入ってようやくご来場の方々の数が平時に戻りつつありますが、施設としてはできることを万全でやるわけですけれども、経

		済的な負荷やスタッフの負荷、必要なスペースがより求められるような状況でもあるので、いろいろ試行錯誤しながら取り組んでいるところです。あと、スローレーベルの活動に私どもが事務局という形で関わり、毎年継続して取組をしています。昨年度はパラリンピックがあり、その開閉幕式をスローレーベルのディレクターの栗栖が務めたことで、レガシーを横浜に定着させるための取組をやっていかなければいけないと、いろいろな方々とご相談しながら準備を進めているところです。来年は創造都市の取組が 20 周年を迎えるということがあります。これまでは各拠点が独立独歩で旺盛に活動してきまして、基本的にはそれでいいのだと思っていますが、昨今、創造界隈拠点がある理由とか、活動について市民と乖離しているのではないかとか、いろいろなお声がある中で、拠点同士がさらに連携を強化した活動・取組を市民に伝えたり、市政の中で効果があったということをきちんと PR したり、やらなければいけないことがすごくたくさんあるなというところです。今一度、取組が始まったところに立ち戻りながら、皆さんと議論を重ねて、意味のある取組にしていく努力をしていきたいと思っております。
	矢野氏	○THE BAYS は昨年に引き続きイベントを増やしたり、１階に入っているカフェやグッズショップで新しいメニューや新作商品をかなりのスピードでつくったり、デリバリーサービス、EC サイトなど、直接足を運んでいただかなくても利用していただけるような取組を充実して実施できたかなと思っております。その中でも、大きく２つ力を入れたところがありました。１つは、ファンと市民と球団職員が一緒にオープンミーティングを実施して、どうやったらベイスターズのチームや横浜の街をよくできるかを議論し、それを私たちで実現していくということをやりました。例えば、廃棄されてしまっている選手の使ったバットを、ファンならではの視点で花瓶としてリニューアルし、実際に販売したところ、即日完売となったという事例があります。それ以外にも、観光ツアーを作り、野球観戦の前に横浜の街に足を運んでいただいたり、ビジターで遠くから来るファンの方には試合前に横浜の街を回遊してもらえるような仕組みをつくったり、そういった意味では、我々が THE BAYS を運営している価値みたいなものを少しは作り出せたのかなと思っております。２つ目としては、関内の街ににぎわいを広げていくとか、各ステークホルダーの皆さんとのつながりを広げていくというような評価軸がある一方で、ビジネスとして成り立たせていくために、ビジネススクールとか、子供向けのアカデミーということでいろいろな人を集めて、さらに収入源を安定させるプログラムを作り出せました。これが作り出せたことによって、より新しい挑戦もできるだろうというところはあるので、昨年の取組を基に、来年はそれをどんどん発展させていくことをやっていけたらと思

		っています。
	野原委員長	○次に、事務局から振り返りの説明をお願いしたいと思います。 ＜事務局より説明が行われた。＞
	野原委員長	○御意見や御質問等がございましたら、お願いしたいと思います。
	遠藤委員	○一つ、見える化という話が全体に共通してあったと思います。どう評価していくかということは、結構ちゃんと考えなくてはいけないと思います。見える化をしていくにも拠点の作業が伴います。政策としての評価と、アーカイブの話とか、実績をどう評価するのかという話があると思いますが、見える化したことがその拠点のアーティストに何かうまく還元されていくとか、次の創作活動につながっていくとか、拠点のための見える化みたいな視点も同時に大事ではないかと感じました。今は興味のないことを見なくていい世の中になっていて、情報を発信すればするほど興味のある人に対してしか伝わらないと思います。だから、見える化という作業を何のためにやるのかということを、もうちょっと丁寧に考えていく必要があって、政策として市民にどう評価してもらうかということは当然やらなければいけませんが、それと同時に、各拠点の活動を見える化することでどう活性化していくのか、どう次につながっていくのか、もしくはそれを２本立てでやるか、そういう視点がちゃんと議論されてもいいのかなと感じました。
	事務局	○市の立場だと政策としてというのはありますが、そこも課題があると感じています。拠点としては、やはり負担がかかるものですし、評価軸のこととリンクするかと思いますがまだ詰められていないので、今年度しっかり時間をかけて、この拠点のどの部分について見える化をしていこうという検討が必要かなと思ったところです。総論でひとまとめに語ってしまっているなという印象はあります。
	恵良氏	○20 年を機に創造都市、拠点含めて、全体の志とかパワーのような、もう一回エネルギーを注入する必要があるのではないかと思います。それと各論的ですが、20 年の間で、特にここ数年が顕著ですけれども、各拠点の持っているポテンシャルとか意味というのがかなり変わってきているように思えます。それは、個々のアートが複合してくる流れもあるし、市庁舎移転によって地域の力のバランスも変わってきて、新旧都心が一体化するということもあるかもしれません。だから、拠点のポテンシャルとか意味をもう一回捉え直す必要もあるかもしれない。それからもう一つ、連携ですが、拠点間の連携とは別に、最近、芸術アクション事業等の文化観光局の施策との関係で各拠点にご協力いただくケースが増えているように思います。情報の発信とか価値観の共有とか、ある程度前広に情報共有したりしながら進めないと

		大変だと思いますので、考えなければいけない。最後に３点目は、成果の行方はどこに向かっているのかという意識がないと、成果のまとめ方も伝え方も分かりやすくなるかどうか分かりません。国際的なところ、郊外、アーティストそのもの、いろいろあるので、その辺の整理が必要ではないかと思っています。
	事務局	○市としても、次期中期計画等の議論、もう少し長期的なビジョンも含めて、すべての施策を改めて見直す作業を全庁的に進めている状況です。そうした大きな流れの中で、我々としてもきちんと議論していく必要があると思っています。まだ具体的な進め方自体を話し合っているところではありますが、皆様となるべくオープンに議論するような場を設けていければと思っております。
	菅野委員	○見える化や評価の目標が何に向かっているのかというところが重要で、横浜市として次の新たなビジョンをどう据えるかが分からないと、多分いろいろな目的や基本方針、あるいは各拠点の役割というところの次のビジョンがつくれない状況だと思います。見通しとしてはいつぐらいに見えてくるのか教えていただきたいです。
	事務局	○まず、次期中期計画、上位計画に当たるものを今年度いっぱいかけて策定していく全庁的な流れがあります。今は骨子を公表しており、今後、市民意見募集を踏まえて内容を固めていきます。創造都市施策についても次期中期計画の流れの中に組み込む作業をしながら、より具体的な方向性についても、同じようなスケジュール感で進めていく必要があると思っています。まだ、具体的な時期を申し上げられる段階ではないのですが、おおむねそのようなスケジュールとなっています。
	六川委員	○20 周年を節目に今後の方向性を見いだしていただきたいと思います。20 年経って、今までの蓄積は大変なものがあると思います。これをベースに、さらにステップアップするような動きをしていく、また、各拠点とのリンケージをもっとしっかりして、委員会でも過去に出ていた各拠点の情報交換をもっと積極的にしたらどうかとか、そういうものを具体的に進めていっていただきたいと思います。また、個別の話ですが、THE BAYS について質問があります。15 年の定借の中で経営的なことも考えながらよくやられていると思いますが、横浜スポーツタウン構想がある中、関内・関外のまちづくりの取組をどのように考えられているのかということと、具体的に何か方策を考えられているかということを伺います。
	矢野氏	○再開発事業者と DeNA のグループがクリエイティブスポーツラボの会員としてブースを利用していただいており、そこで日々コミュニケーションを取らせていただいています。試験的なイベントを、まずは THE BAYS で実施したり、市庁舎街区に入れる前にどういうことができるかみたいなところは、これまでも一緒にやらせていただいていま

		す。THE BAYS とベイスターズ、関わり方の視点のすみ分けが社内でできていないところもありますので、具体的にお答えできることはないのですが、全く別でということではないと思っています。
	六川委員	○関内に、ベイスターズ通りという通りがあります。例えば、その通りの活性化にもっと THE BAYS が参画していくような取り組み方とか、いろいろ戦術的なことはあると思います。これから見直しをしていくというお話もありましたので、THE BAYS としてもっと積極的に出ていくというスタンスでやっていただくと、街は歓迎していると思いますので、よろしくお願いします。
	日沼委員	○創造都市の大きな目標、これからの継続ということで、私なりにこの創造都市の成果というか、これを取り巻く人たちはどんな人たちなのかなと改めて考えてみました。まずはアーティストやデザイナーというつくり手の方たちと、その方たちを支える現場の方たち、受け取るコミュニティという、３者によってつくられているのかなと考えた中で、先ほどのスクールの問題です。いろいろな講座をそれぞれやっているということで、地域の人たちやアートコミュニティの人たちを育てていくこととか、ものづくりを楽しむ人と、それを職業としてやっていく人が混在しているスクール問題と、もう一つは運営を支える人たちというところの問題が２つ重要かなと思いました。2019 年の「美術手帖」の美術教育特集でのアートスクール講座ガイドの中に、アートをキャリアに生かしたい、創造性をビジネスにしながらキャリアに生かしたいという分類の中で BankART School と黄金町芸術学校が紹介されていました。市民の創造というよりはキャリア形成というふうに見られているという、客観的な記事があったので、そういう目で、誰に対して働きかけていくものかを戦略的に考えると、どういうコミュニティを育てていきたいのかとか、どういうコミュニティとのパートナーシップをつくりたいのかということも一つ見えてくるのかなと思いました。それから、運営体制についてもそれぞれの拠点で本当にご尽力されておられると思います。来年の１月に初めて日本でのアートジョブフェアという人材マッチングのフェアが開催される予定で、そこでアートの社会的価値を高める、特に人が支えていく現場ということを社会に発信していく意味でのジョブフェアが開かれます。アートの現場は、言葉を選ばずに言うと、１人ずつの献身によって支えられているというか、きついし大変で、働き方として非常に大きな問題があると見られています。若い人たちが、自分たちのビジネスとしてアートの現場に取り組んでいく時に、支え手になっていく人たちが何を考えて、例えば創造拠点に対して自分のフィールドとして何を考えているかということは、継続性を考えていくときにすごく大事なことだと思います。ただ、事業評価のみならず、運営のあり方をどのように支えていくかを、市が注力して検討していただきたいなと改め

		て考えました。
	野原委員長	○私からもいくつかコメントします。１点目は、コロナ禍で、特に舞台芸術系の分野はかなり厳しいというかご苦労されている中で、まさに献身的な活動で何とか支えていただいているところもあるのかなと思います。令和４年度は比較的、人は戻ってはいるとはいえ、まだまだ注意を払ってやっていかなければいけないところがたくさんあると思います。市のほうでも、サポート体制は継続的に検討いただいて、各拠点の負担が少しでも減って、皆さんがよりよい活動をできるような知恵を絞っていただくとよいと思っています。２点目に、指標や見える化をどう考えるか、というのをぜひ検討していただきたいのですが、とかく評価のための評価、つまり指標を設定することが目的になりがちなので、何のために評価しているのかというものがないと、単にKPIを設定するだけでは、政策の効果として現れたり、因果関係が見いだせない数値もある中で、有効な見える化にならないのかなという気がしました。誰のための評価なのかもありますかね。どういうターゲットに向かって見える化を考えているのか。ユーザー向けもありますし、運営者自身が次のステップに向かうための見える化みたいなものもあると思うので、外出ししてでもしっかり検討して、うまく還元できる仕組みができたらいいなと思います。３点目、拠点同士の連携の話もたくさん出ていましたし、庁内での関係者連携をぜひやっていただきたいと思います。ACYと、例えば拠点との関わりのあり方で何ができるかみたいなことも、もともと関わっておられる方もたくさんおられますが、何かそういった話で広がっていくものもあるかなとか、そういう、いろいろなつながり方ができそうな気がすると思っており、そのあたりがまだ生かせていない気もしているので、ぜひそのあたりを検討いただきたいと思います。 先ほどから20周年という言葉が出ていますが、2024年を一つのメルクマールとしたときに、後追いでいろいろなプロジェクト、先ほどの見える化もそうですし、そういったものがどうできるかみたいなところを今から考えないと、2024年に20周年としてお示しできないなという気がします。そのあたりも含めて、全体をフレームアウトして、ご検討いただきたいと思います。 ○では、質問、意見がなければ、審議事項（１）については了承でよろしいか。 （了承） ＜拠点ディレクター退室＞ **１　審議事項（２）：旧第一銀行横浜支店の公募結果について** ＜事務局より説明が行われ、議題について審議が行われた。＞

		２　その他
	遠藤委員	○昔から連携のことをずっと議論しているのですが、多分、拠点の人から見ると外に出ていくという話がたくさんあって、その外に出ていくという話が一つは連携という話につながっていると思います。個々の拠点がどうつながっていくかという連携だけではなくて、拠点から見ると、自分たちが地域とどのように連携していくのかという話とか、市とどのように連携して何をやっていくかということも含めた話が恐らく必要になっていくはずですよね。黄金町のマスタープランを作るという話も、外に出ていくということが一つ、どんな出方があるのだろうかという議論の中でまだ見えていない部分はありますが、外に出るという話がいくつかの拠点から出ていたし、今日のさっきの事業者の提案の中にも、外に出ていくというような提案があったと。よくよく考えてみると、そこの部分は創造都市の枠組みの中できちんとした考え方がないような気がします。外に出ていくための仕組みとか体制とか視点とか、その辺は多分、創造都市の考え方の中に、界隈という言葉の中でほんわりはあるけれども、具体的にはないような気がずっとしていました。でも、そこが大分求められているような気がしていて、分科会の中でもそれに近いような話があったのでご報告です。
	菅野委員	○１点だけ。政策とかこれからのビジョンを考えるときに、これまでターゲットとか対象と考えていましたが、言葉の言い方としてステークホルダーという、より関係性というか、利害関係というか、それをどのように設定していくかによって対象が変わってくると思います。日沼さんがおっしゃっていましたが、それはアーティストなのか、それを運営する側なのか、いろいろな制作に関わる人がいるので、そういう考え方を取り入れて、施策形成と評価というところを、より明確にしていったほうがいいのではないかと思いました。
		情報提供 ＜事務局から、情報提供が行われた。＞ ＜事務局から議事録の確認依頼や今後のスケジュール等について、事務連絡が行われた。＞
	事務局	○これをもって、令和４年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会を終了する。委員の皆様、長時間にわたりありがとうございました。
資　　料	①次第 ②［資料１］委員名簿 ③［資料２］前回議事録（令和４年３月 18 日開催分） ④［資料３］令和３年度事業評価シート ⑤［資料４］旧第一銀行横浜支店の公募結果について	
特記事項		